**№71　テーマ『人間的魅力とは何か』**

**講話日2019年2月22日**

**皆さんこんにちは、今日はよろしくお願いいたします。だいぶ寒さも和らいできまして、いよいよ三寒四温という時期に入りました。今年は年号も改まって、また新天皇も誕生されて、非常に大きな節目となる年だということで、いろんな意味で清新の気が満ちるという、新しいことが始まるという気分が高まってくるのではないかという風に思っております。だけどもやはり、現実は激変・激闘・大動乱の最中でまだまだいろんな思いもよらざる変化が続くのではないかという風に思っています。そのなかで一番注目するべきはやはり人工知能・AIの急速な普及ということではないかという風に思われるわけであります。人工知能の力というものは仕事にも浸透し、また生活の中にもどんどん入ってきて、あらゆるものが機能を高めていく、あるいは変えていく、そういう目まぐるしい変化がどんどんと人工知能の普及によってを出てきておりまして、これに対して我々人間がどのように対応していくかが、今の現実において避けて通れない1つの大きな課題ではないかと思います。**

**人工知能というものは人間がつくったものであって、人間の理性能力の延長線上に出てきたものでありますけども、だけどもやはりひとりの人間の理性能力をはるかに超える高い知能というものを持っているわけであります。それがゆえに、どうしてもそういう理性的な観点からするならば、人工知能はひとりのひとりの人間の理性能力をはるかに超える、あるいは全人類的な規模における能力の集合と言える統合されたものですので、どうしてもひとりの人間としてはそれに従わざるを得ないという気分になってしまって、人間としての無力感を感じ、人間の能力における劣等感を感じてしまって、結果として人工知能に支配される。これは、近代において機械がつくられたときから“人間は人間がつくったものに支配される”ということは、ずっと存在してきました。人間が便利なものとしてつくったものによって人間が支配される、機械をつくったことによって人間そのものが機械に合わさないと仕事ができない…そういう意味で人間が機械化されるという状況がずっと続いている。これが、人間の労働において大きなストレスになって、人間を苦しめてきた。これを阻害現象言います。自分がつくったものによって自分が支配されることを阻害と言います。それと同じようなことがもっと極端な形として、人間と人工知能の関係においてこれから出てくるわけであります。これは避けることができない必然性であります。人工知能によって人間が支配される。人工知能の判断・命令に従って全社員が動く。そのような体制がどんどんどんどん出来上がっていく…これが避けることができない未来であると。**

**それがためにひとりの人間の理性能力の判断をはるかに超えた人工知能の判断に身を任せて、そして人間としてそれに敵わないと無力感、劣等感を感じて、人間としての誇りを見失ってしまう可能性があります。一番この人工知能の問題で恐ろしいのは、人工知能の軍事利用であります。人工知能はもう実際に兵器として使われておりまして、しかもそれがロボットに搭載されて、そして人間の軍隊に代わってロボットの軍隊ができて戦う…そういう状況が出てきておりますし、また最近ではアメリカでも、中国でもロシアでも宇宙軍というものが形成されまして、そして宇宙が新たな戦いの舞台になると、そういう状況になってきました。お互いに自分たちの不都合な衛星を撃ち落とすとか、あるいは宇宙の中でロボットを使った戦争が将来行われることも…SFで考えられることはやがてやってくるということですね。それは可能性として避け難い。そんな時代にこれから我々はどう生きていったら良いのか。やはり会社の経営においても、仕事の上におい**

**てもよく考えておかなければならない課題ではないかという風に思います。**

**確かに人工知能の考え、判断、能力というものは、ひとりの人間をはるかに超えた偉大な・強大なものではありますけれども、それでも人間においては、理性の延長線上である人工知能の判断・結論に人間は身を任せて良いのかどうか。人工知能を信じて仕事をしていても良いのかどうか。やはり人間にとって一番大事なものは理性的判断の延長線上にある人工知能の判断ではなくて、人間にとっては人間的判断であって、本当に人工知能の判断・考えが人間の心を本当に納得・満足させることができるかどうかを考えていかなければなりません。人工知能がこのように判断しています、となったときに皆が納得しているのか？ やはり人間においては人工知能の判断よりも人間の人間的判断が優先されなければ、人間は人間としての自覚と自信と誇りと尊厳を持って人生を生きていくことができません。とにかく基本的には人工知能というものは、人間がつくったものであるとまずは考えなくてはならないし、人間は単なる理性的な存在ではなく、理性も感性も肉体もあり、その相乗効果として生まれてくる心というものが人間の人間たる所以の本質であると。であるがゆえに、心を満足させる、心が満たされなければ、本当の人間的な納得はないんだ。**

**そういう意味で、お客様と対する場合でも人工知能がこのように判断しているから、と言ってお客様が納得するかどうか。人間としてお客様の心が本当に喜び、満足し、納得するという仕事をしていかなければなりませんから、あくまでも人工知能は人間がつくった能力であり、そこには人工知能と言えども理性的限界があると。人間の命というものは人間がつくったものではなくて、人間の力をはるかに超えた命の根源である宇宙の摂理がつくり上げたものである。だから、人間がつくった人工知能と宇宙がつくった人間とどっちが上か？ 単次元の理性能力の判断よりは、理性・感性・肉体という3つの力が有機的に統合されて、そこから出てくる判断、心を満たす判断というものが人工知能の判断を超えるものだという風に人間は考えていかなければならない。宇宙がつくったものと人がつくったものとでは、どちらが質において上だということを考えるならば、明らかに宇宙の方が上だと。人間よりも宇宙の方が確かに原理的にいって高レベルで、人間がつくったものの方が宇宙がつくったものよりも優るということは原理にいってあり得ない。**

**そういう意味で、我々は人間がつくったものと宇宙がつくったものとの次元の違いを常に意識することによって、決して人工知能の判断に身を任せるという愚かなことはしてはならない。そして人間にとって一番大事なことは、心を満たすこと・心を満足させること・心を納得させることなんだ。単に理性を満足させ、合理的に正しい結論を出すことが人間として大事なのではない。だけども、人間は理性を持っていますから理性的判断も大事なんですけども、理性という単次元における判断は人間的な判断ではないということを知っておいてください。人工知能が出す結論というものは、人間の仕事や生き方において参考とするべきものであり、人工知能というものは人間にとって仕事をし、生きるための手段として用いなければならないものである。そして、人工知能の進歩というのは、人間にとって人為的に押し止めることができない無限の可能性を持っております。技術の進歩というのは、決して限界が来るまで止まることはない。だけども、人工知能は人間にとって手段なのであって目的ではない。また、人工知能に人間が支配される関係性をつくってはならない。あくまでも人工知能は人間がつくったものであって、人工知能の主人は人間である。そして人工知能は手段なんだ。いかに人工知能が進化し、発展しようとも永久にこの関係性は変わらない。人間が主人であり、人工知能は手段だ。だから人間はそれを使いこなし、人間が支配し、そして人間が人間として幸せに生きることができるような手段として人工知能を使う、とい**

**う関係性を維持することに、我々は留意していかなければならないという風に考えることができます。**

**でも実質、人工知能が多くの仕事の領域に入ってきています。会計処理なんかは大蔵大臣とかいうソフトにもう任せておいたら良いという感じで、人工知能やコンピュータ、機械などに任せるというように、そちらの方がより正確だと。そういう状況がずいぶんと出てきて、「将来は税理士は要らん」とも言われています。全部機械にインプットすれば全部表になって、いろんな資料が出来上がってるという状態ですから、ついつい人工知能を信頼し過ぎてしまう。だけども、ちょっとしたインプットの過ちというものが、インターネット・人工知能の判断を狂わせることもあります。そのように人間は不完全である限り人間がつくった人工知能も不完全である可能性というか、限界を常に持っているんだという危惧を感じながら、我々は人工知能を使わなければならないと。**

**そういう意味では、人工知能の時代になればなるほどますます人間とは何なのか、人工知能にはできない人間のみの特有の世界とはどういうものなのかということをちゃんと知って、それを人間がつくる会社の中で自覚的に活かし、人工知能にはできない人間的な温もりや暖かさや、人間的な能力・働きを十分意識しながらお客さんに対応しないといけない。うっかりすると人工知能の判断の方が自分の判断より優れているということで、人工知能の判断をお客様にも推し進めてしまうことになったら、これは結果的に言って非人間的な会社だと、非人間的な人間だと、冷たいという判断をされて、お客様からの人間的な信頼を失う可能性が大いにあります。**

**例え人工知能の判断と比べて理性的に劣っていたとしても、やはり人間に対応する場合には人間的判断を優先させなければならない、心を優先されなければならない、感情・欲求を計算に入れなければならない。あるいは仕事の面でも無理をしないで体力の限界も計算に入れながら、我々は人工知能との仕事をやっていかなければならない。それなしには、温もりというものが消えてしまう。決して会社として人工知能の判断を優先させるような過ちを犯してはならない。やはり、お客様に対応する場合には、どこまでも人間的な情感・温もり・心遣い・思いやりというものを全面に出して、そして人工知能の力を背後に隠して参考程度に留めて、仕事をしていくという人間的な仕事の仕方の本質がどこにあるのかということをあくまでも忘れないようにしていく必要があります。これがこれからの同業他社との差別化を考えた場合、非常に大きな力になる。他社は人工知能やコンピュータを駆使して、理性的な判断を正しいと思ってお客様に押し付けたり、お互いに会社のなかで人間関係において「君の言うことより人工知能が正しい」ということで人工知能を優先させるとするならば、明らかに会社が人間的な温もりを無くしてしまって、人間としては住心地の良くないと言うのか、ストレスを感じるような…そういう事態になっていってしまう可能性があります。だけども、我々は人工知能をバカにしてはならない。最高の手段能力として使いこなせる力をどう保持するかが問題であります。我々は人工知能を支配しなければならないし、人工知能を使いこなさなければならない。ということは人工知能の判断も我々はある意味で疑ってかかるということを常にする必要があります。完全にギブアップで、「人工知能でこうだ」ということを信じた時に人間は人間であることをやめなければならない。そして人間でありながら非人間的な人でなしの仕事しかできないような状況に陥ってしまう。どこまでも人工知能の判断は参考程度に留めるという限界・節度を我々は見失ってはならないと思います。そしてやはりお客様も人間だから、他社とも取引先とも人間関係だから、また社内でも人間関係が大事だから、人間的な対応の仕方、付き合い方というものを優先させて、理性的な言動あるいは人工知能やコンピ**

**ュータの判断というものは、やはり参考程度に留めておくという、そういう自覚がこれからの時代には非常に大事になってくるんじゃないかという風に思われるわけであります。**

**その上で我々がこれから人間として人工知能の時代を生きていくために、人間のみに許された特有の世界とは何なのか。人間にのみある人間的魅力とは一体何なのか、ということをある程度自覚して、それを見失わないようにあるいは人間的魅力をますます自分自身の中につくりながら、人間的魅力を讃えた仕事の仕方、生き方をこれから考えていかないとならないと思います。実際問題、今、人工知能を研究している人たちの最先端の問題は、人間とは何かという課題なんですよ。一応人工知能のことは研究していますし、人工知能の知能を極限まで追求しなければならないと言いながら、その先に彼らが議論している内容は人間とは何か、人間にしかできないこととは何かということが最先端の課題として問題にされています。そこで我々は人間であることをやめないで、人間であり続けながら人工知能に勝つための、あるいは人工知能を支配するためにどういう魅力を人間として追求し、生き、持ち続けなければならないか。何を人工知能に手渡してはならないのか。人間として持ち続けなければならない・保ち続けなければならない・磨き続けなければならないものは、なんなのか。そのことを考えてみたいと思います。**

**人間的魅力というものには3つの領域が存在します。人間には人格というものがあって、格がなければ人間ではない。基本的には人工知能に、AIに人格を求めることはできません。人間のみ持ちうる最高の尊厳性であります。人間は犬猫ではない。まずは人間の格というものを持つことが大事である。人間には人格の魅力というものが存在しまして、人格の魅力は犬猫にはありませんし、植物にもありませんし、人工知能にもありません。**

**人格の魅力とは何なのか。前々から話をしてるんですけど、人格というものを形成する原理は3つあり、第一番目は不完全性の自覚から滲み出る謙虚さというものを持っていることですね。人工知能は不完全性の自覚を持つことができません。常に人工知能は完璧完全を目指すべきだと思ってしまう。不完全性の自覚を持ってしまったら、それこそ信用失墜ですから。人間は失敗することも大事なのであって、人工知能は絶対失敗したらいかんというそういう責務において存在するものですけど、人間は失敗してもいい、不完全だから必ず失敗する。そのことによって、なぜ失敗したのだろうと思って成長する。人間にしかできない生き方を持っているわけであります。人間においては失敗が許される。それを償って、より素晴らしいものに成長していくという生き方が人間には許される。であるがゆえに、不完全性の自覚からにじみ出る謙虚さが人格の根源である。**

**人格の条件は3つあって、その2つ目はなんなのか。人間は不完全であると自分で自覚することができる存在ですけども、不完全を自覚するためには完全であるものをイメージする・意識することができないといけない。つまり、不完全でありながらも完全なるもの、完璧なるもの、絶対なるものを意識して、それを追い求める生き方をせざるを得ない。不完全で良いんだと諦めを持ってしまってはならない。不完全であるがゆえに完全・完璧・絶対を求める生き方をする…ここに人間が持っている成長意欲の原点があって、人間が欲求を持つのもまさにこの構造がゆえ。命が不完全であるがゆえに完全なものを意識するという構造を持っているがゆえに我々は欲求するのである。欲求とは今ないものを求めることである。より以上を目指すという在り方が人間においては特有である。自ら意識して自己実現・自己創造・自己完結を目指す。人間としてもっともっと成長したいという意欲を持つ。それがゆえに人間は人格として不可能を可能にし、今できないことをできるようにし、限界に挑戦するという生き様を持つ。これも人間的魅力のひとつである。**

**第三番目は、人間は社会的存在である。社会の中で生きるためには、人と関わらなければならない。人の役に立つことを喜びとする感性なしには、社会人としては存在し得ない。人の役に立つことを喜びとする感性は、愛だ。この愛が社会において具体化されたものを社会性という。社会性とは、性格が違っても一緒にやっていける、考え方が違っても一緒にやっていける、価値観が違っても一緒にやっていける、宗教が違っても一緒にやっていける…これを以って社会性という。性格が違ったら一緒にやっていけない、考え方が違ったら一緒にやっていけない、価値観が違ったら一緒にやっていけない、宗教が違ったら一緒にやっていけない…このことを以って社会性がないと言える。ということは、今世界は社会性がないと言えます。社会性がなんなのかを知らないんですよ。考え方が違ったら一緒にやっていけないと言えば、「そうだよね」と言って排除、価値観が違ったら一緒にやっていけないと言っても「そうだよね」と言って、価値観が違う者を排除する。こうしていることを理性と言う。**

**だけども、人間は社会的存在であり、社会の中で生きるためには何が必要なのかと言ったら、社会というのはいろんな考え方の人がいるし、いろんな価値観の人がいるし、いろんな宗教の人がいる、だから、社会というものが秩序を持って存在するためには、どうしても“異なる”人と一緒に生きていくという社会性が求められるわけであります。価値観の違う人と一緒に仕事ができなかったら、それは原理的にいって社会の秩序が崩壊します。社会が破壊されるんです。人間の生きる空間であり、生きる場である社会が人間の生き方によって壊される。今まさに社会は、社会性の崩壊、人倫の崩壊、この矛盾と苦しみの中にあります。世界中すべての国において、今社会は崩壊しています。内部分裂、混乱しています、まさに内乱状態、全部。社会に秩序のある国家は一国も存在しません。**

**残念ながら人類は社会性がなんなのかという自覚に目覚めて生きてはいない。それがゆえに我々はこれから近代よりももっと素晴らしい時代をつくり、また民主主義社会よりももっと素晴らしい世界をつくるためには、どうすれば社会を内乱状態に陥れずに社会の秩序を保って生きていくことができるか、本当に人間が安心して生きていくことができる社会とはなんなのかということを考えていかなければなりません。そのためには、考え方の対立を乗り越え、価値観の違う人と共に生き、仕事をしていく力をつくっていき、宗教が違っても協力できる…そういう在り方を人類は求めていかなければなりません。これは明らかに今の人類の人間性よりももう一段高い次元に進化させなければ実現しない課題であります。**

**だけども、人間は社会的存在であるがゆえに人間の格を持って社会の中で生きるためには、どうしても考え方の違う人と共に生きていこうとする愛が求められます。人間の格として求めていかなければならない愛とは、矛盾を生きる力だ。考え方が違い、価値観が違う人とも共に生きて仕事ができる…この力が本当の人間の格というものを最後に決める原理・手立てである。ということはまだ人類は、本当の意味で人間の格というものを整えていない。まだ人類は人間への道を歩んでいるのである。今の人類をもって人間とは言えない。**

**人類史とは人間性の自覚史だと言われています。人間は歴史をつくることによってだんだんだんだんと、母なる宇宙がつくってくれた人間という在り方に近づいていっているんだ。人間として完成されているわけではない、これからどんどんどんどんと潜在能力を顕現させながら、人類は本当に母なる宇宙がつくってくれた人間に相応しい人間らしい人間にどんどんどんどん近づいて**

**いく…そういう歩みをこれから歴史の中でしていくのである。だから、人類史とは人間性の自覚史だと。人間が人間に目覚めていくという歴史が人類史だと、そういう風に言われることもあります。**

**そういう意味では当面、我々は社会的存在として、どうしても求めていかなければならない人間の格の最後の第三番目は、矛盾を生きる愛だと。この力を持った時、人間には本当にさすが人間という魅力が出てくるわけであります。これから求められる人間の格の最後の第三番目というのは、これまでに何度も何度も今までお話をしてきましたので、ここで繰り返しお話すると「もうわかっとる」と言われそうな内容ですので、これまでのお話から推察してもらいたいと思います。だけども、この考え方の違う人と共に生きていくことができる“矛盾を生きる愛”は、作られなければ離婚の激増は止まりませんし、幼児への虐待は防げません。そういう意味で我々は愛というものをただ自然発生的な感情・情緒・本能という次元に留め置いておくのではなくて、愛を文化たらしめて、愛を能力として成長させて、愛の実力をつくる…その努力をすることによって我々は愛においても人間の格をつくり、人間の魅力を高めていくことができることになっていくわけであります。これもAIには期待できない。人間独自の努力によってつくられる社会であります。**

**まず人間は、人格の魅力という他の動植物には無い、人工知能には無い魅力を我々は自覚しながら磨いていかなければなりません。**

**ふたつ目の人間的魅力とはなんなのか。これは、人間力であります。人間だから人間力を持たなければならない。人工知能力を持ってはならない。AI力を持っても人間ではない。人間には人間力が必要だ。人間力とはなんなのか。人間力とは人類の長い歴史の中で人間が人間として生きるために今日まで養ってきた力。人間が人間として生きるために今日まで養い、つくり出してきた力のことを人間力と言います。**

**人間力の魅力というのはどういうものかと言うと、人間力には内的人間力と外的人間力というものがあります。内的とは人間が自らの命の中に本質的に持っている基本的な人間力と言うことができるものです。内的人間力とは、理性に対応する知力、感性に対応する気力、肉体に対応する体力、意志の力、愛の力、この5つが内的人間力と言われるものであります。**

**知力というものは、AIには存在しません。知力とは単に知識や技術ではなくて、考え出す力です。新しい知識を考え出し、技術を考え出し、新しい未来を考え出す。歴史をつくる。これはAIにはできません。この知力を我々は放棄してはならないし、自覚的に持ち続けなければならない。AIは知識の力や技術の力は持っていますけど、知力は無い。知力は人間のみの能力である。それから感性に対応する気力。AIには感性はありません。感覚はつくることができますし、感情もつくることはできますが、感覚・感情を現象する根源である感性はAIには存在しません。なぜなら、感性は命の本質である。命がつくれなきゃ感性は存在しません。AIは、人工知能は命ではありません。機械です、どこまでいっても機械です。感性は命の本質である。この感性は宇宙から命に与えられたものであって、命は感性によって生きている。この感性が持っている力の根源、宇宙と繋がった時に感性から出てくるものを気力といいます。気力を充実させて生きなければならない。これも人工知能にない魅力ですね。気力を充実させる。**

**そして肉体に対応する体力ですね。体力の中には健康ということも含まれています。それから意**

**志の力、愛の力。これら5つを内的人間力と言います。**

**この内的人間力というものが、外の社会に向かって表現されて、そして社会を生きる力として人類は歴史の中で作ってきた力を外的人間力と言います。**

**外の世界、社会を生きるためにつくってきた人間力を外的人間力。内的人間力が統合されて、社会に向かって表現されて出てくるものが外的人間力。**

**外的人間力にも5つの力があります。**

**それはまず人間であるならば政治力を鍛えなければならない。政治力は人間的魅力だ。本当に政治力が無ければ、社会を生き抜く力が無い。経営力も根幹には政治力が必要である。社会の中で生きていくためには、多くの人間と関わりながらそれをどのようにいろんな問題を収めていくかという問題解決能力、問題処理能力を政治力と言います。人間には問題は避け難い、いろんな問題が出てくる、それをどう丸くまとめて、そして皆を納得させて処理していくか。そういう政治力というものがどうしても社会の中で、社会の秩序を保つために必要な力として人類はつくってきました。政治の根本は言葉です。言葉は言霊と言って、自分のひと言で何人が動くか、これをもって権力と言います。それだけの魅力ある言葉を使わなければ、本当の政治家にはなれない。だけども、今は残念ながら魅力ある言葉を使って国民を感動させる政治家がいない。**

**オバマさんなんかは、「Yes,I can.Yes,We can.」と言って、選挙の時に一種魅力、独特の言葉として言っていましたし、またヒトラーも国民に対する演説の中で国民の心を奮い立たせるような魅力ある言葉を発しました。彼は政治家ですね。北朝鮮の金正恩さんも国民の心を鼓舞し、国民に誇りを持たせるような、そういう言葉を発しながら国をまとめています。あの若さであれだけの統制を取って、そして国際社会においてもアメリカと対等に渡り合えるという政治力は大したもんです。政治にはある意味で「権謀術数」という悪賢さも求められる。**

**社会には悪が半分、全部半分。悪いこともできなかったら本当に良いこともできない。これが娑婆世界の現実です。悪と対立し、悪を恐れていたのでは、まだこの娑婆世界を生きる実力があるとは言えない。必要ならば悪事もなし得る…それほどの腹が、現実の経営・仕事には、また人生を生きる上では覚悟として必要なんだ。それなしには本当には会社を守りきれない。そういう深い政治力も現実に必要なので、それを求めていく努力をしなければなりません。まずは外的人間力のトップは、政治力。**

**その次は、経済力。これは「金がある」ということではなくて、現実の世界の経済システムを熟知して、支配し、使いこなせる力を以って経済力と言います。結果として金には困らないという。金に困っているようでは経済力とは言えません。経済力があれば金には困らない。必要とあらばいつでもつくれる。であるがゆえにその人は経済システムを熟知しており、自分が思うように動かせる、使いこなせる、これを経済力という。だけどほとんどの人は経済に支配されてしまって、金で苦しんでいる。それは経済力がないからです。**

**人工知能との関係においても人工知能に支配されてしまってはならないので、やはり人間は人間力を持って人工知能を支配しなければならない。でなければ人間力があるとは言えない。**

**３つ目の外的人間力は、教育力ですね。人を育てる、部下を育てる、子どもを育てる。あるいは部下が上司を育てる、子どもが親を育てる。教育的な影響力、これを教育力と言います。**

**その次は文化力。人間は文化をつくる動物と言われています。人間は文明をつくり、文化をつくり、歴史をつくる。これを実際にやってきたので、その力がある。それを文化力と言います。カルチャーの力。人間の魅力として文明、文化をつくる力を持たなければならない。今ある文化にどっぷり浸かっておったのでは停滞だ。常に我々は新しい文明をつくる自覚が必要であり、新しく今までになかった文化をつくり出す努力をする必要があり、また未来を切り拓く、歴史をつくり出す力を以って人間力と言う。それらを統合して文化力と言うんですね。**

**最後の5つ目は軍事力。国家で言えば軍事力なんですけども、個人の生き方においてはこの第5番目は、悪への備え。悪から身を護る力を我々は常に持っていなければならない。でないと、足元をすくわれる。そういう意味でも社会とはなんなのか。社会とは善と悪とが入り乱れた世界であって、人間は善のみの世界を求めますけど、そんなものはあり得ない。常に悪は半分ある。だから、悪に備えなければならない。騙されないように、恨まれないようにと、いろいろ自分の身が害されないように、会社なら総会屋対策など外からいろいろ言われて、会社が損をしたり、社員が困った立場に立たされるような…そんなことが起こらないようにいろいろと保険を掛けたり、いろんな保障を考えて、あらゆる悪から身を護る手段を持っていないと会社として法人としての人格が無い。人は護らなければならない。社会の半分は悪だ。悪の中に我々は身を晒して生きているんだ。いつその悪に引きずり込まれるかもしれない危険性がある。経営上もよくよく考えていないといけない課題であります。どんな人間の心にも悪心は宿る。よく会社なんかで横領事件が起こりますけど、「こいつは大丈夫だ」と思って信じ切ってしまうと必ずその人間が裏切るんだ。腹心の裏切り…それが会社の存続が危うくなる大きな課題のひとつである。**

**信じ切ってはならない。だけども、信じなきゃならない。信じ切って任さないとならないけども、必ずそこには「どんな人間も悪心が半分はある」と。その時そのことが起こった時にどうするか、そのことが起こらないようにどう日常から気を付けるか。完全に信じて任すんじゃなくて、ちゃんと不完全な人間と意識しながらチェック機能を十分につくっておく。そして、「いかなる人間にもそういう会社の裏切り行為をさせない」というそういうシステムというものをつくる努力は、悪への備えであります。保険を掛けるということですね。**

**とにかく、外的人間力として我々が養っていかなければならない基本的な生きる力は、この5つ。政治力と経済力と教育力と文化力と軍事力（悪への備え）ですね。これを人間力の魅力と言うことができて、これも人工知能には存在しません。**

**今日最後の３つ目の人間的魅力のフィールドはなんなのか。これは人間性ですね。**

**人格の魅力と人間力の魅力と人間性の魅力。この3つが人間に特有の、人間として持つことが求められる努力の課題であります。人間性の魅力とはなんなのか。人間性というのは、人間性そのものの構造は、性格と人格の絡み合いということができます。人間には性格という格もある。だけど、性格は自然に出てくるのであって自分でつくるものではない。性格は変えられない。性格は気が付いたら「こういう性格になっちゃってた」というものであって、これは感性論哲学ではなっちゃんジュースと言ってるんですけど、なっちゃうものなんですよね。自分ではつくれない。**

**だけども、人格は生まれてから後に自ら努力し、また社会の中でいろいろ教えられてつくられていくのが人格である。性格は自然、人格は努力。自然に備わってくる、遺伝的要素と体験・経験の積み重ねという後天的要素の両方があるんですが、性格は自然になってしまうものであって、自分ではつくれません。だけど、人格はつくれますし、人格を変えていくことはできます。自覚的に**

**できる。であるがゆえに、人格とはなんなのかをちゃんと知って、努力することが必要なのです。とにかく性格と人格の絡み合いは人間性です。構造的に言えばそういうことですが、人格という有機的な世界というものは、体系的にどう成り立っているものなのかを考えていくと、人間性というものは、理性と感性と肉体の3つの要因の有機的結合として成り立っていると言うことができます。ですから、人間性には理性的魅力と感性的魅力と肉体的魅力と3つの魅力のフィールドがあります。そして理性という領域の中にも人を感動させることができる魅力が3つあり、感性という領域の中にも人を感動させることができる要因が3つあり、肉体という世界にも人を感動させることができる原理が3つある。理性・感性・肉体という3つのフィールド（領域）の中にそれぞれ3つずつの人間的魅力ということができる、人を感動させることができる要因が存在します。**

**人間的魅力というのは基本的にはどういうものなのかと言うと、魅力とは、人を感動させることができるものを以って魅力と言います。多く社会においては感動することが大事なんだということを言われますけど、感動するのは命の自然であります。人間として大事なのは人を感動させる力です。人を感動させる力を以って人間力と言います。プロであれば…これもいつも申し上げていることですが、何かしら人を感動させることができる力をひとつは持っていないと、プロとは言えない。「さすがプロですね」と言ってもらわないと堂々と金は取れんというのが、感性を原理にした仕事の仕方の目標ですので、何かしら「さすがプロですね」と言ってもらえるもの持って初めて金が取れる…「さすが」と言われないような力で金を取ろうなんていうことはおこがましいということですね。そういう意味で、何かしら人を感動させる力というものを我々は何かひとつは、「これを俺の魅力にしよう」というものを追求していかなければならない。そういう人を感動させる要因が理性の中にも感性の中にも肉体の中にも3つある。**

**では、理性的魅力とはなんなのか。理性的魅力の中には、人工知能・AIに置き換えることができる知識の量とか技術の水準・質も入っているのですが、人間的魅力として言うことができる理性的魅力は、我々は知力というものを考えなければならない。知力とは、今無いものをつくり出す力・考え出す力。それがAIには無い人間独自の魅力、理性的魅力と言えます。知力の中でも特に大事なものが学問という力ですね。物事に根拠を与える。学問はすべてなんでそうなのか、何故そう考えなければならないのか、なんでそう言えるのか、その根拠を明確にするところに学問的魅力がある。なぜ学問は物事に根拠を与えるという努力をもっぱらするのであるか。人間が学問をつくり出した意味は一体なんなのかと考えると、学問を持つことによって物事の根拠を明確にすることによって、人間は自信を持って行動を知り、自信を持って言葉を発するということができる。すなわち人間の自信というものを、人間として生きる自信をつくり出す力が学問の力である。そのために学問は物事の根拠を明確にする。それが明確になると自信を持って、堂々と物を言い、また自信を持って堂々と行動することができる。その力が湧いてくる。根拠を追求する学問、それから新しい知識をつくり出し、新しい技術を生み出し、新しい時代をつくり出す…そういう力が知力として、まずは理性的魅力に挙げられます。**

**2番目の理性的魅力は知恵ですね。知恵とはみんなが「どうしたらいいだろ」と困っている時に「こうしてみたらどうや」と言える“気付き”が湧いてくる、潜在能力が湧いてくる、知恵が湧いてくる。知恵の力というものも大きな人間的魅力です。知恵が湧いてくる人間になるためにはどうするか。今自分の持っている理性能力で仕事をしている限り、知恵は湧いてこない。今自分の持**

**っている理性能力ではなんともならん…だけどなんとかしたいと思って頑張っていくと、必ず命から潜在する力が湧いてきて、知恵として出てくる。それが気づきとなり、また潜在能力の顕現と言われる力である。それが出てくると人を感動させる。「なかなか、あの人は知恵者だな」と言って、人は感動してくれる。その知恵者になるためにはどうしたら良いかと言うと、今自分が持っている理性能力に依存しないで、今自分の持っている力でできないことをできるようにしていこうとする、限界への挑戦、不可能を可能にする。そういう努力を積み重ねていかないと、命から知恵は湧いてくる構造を命につくり出すことはできません。その構造が命にできたら、次々と知恵が湧いてくる、気付きが湧いてくる人間になれます。これが知恵者となる原理です。**

**3つ目の理性的魅力は、天分です。素質とも言います。すべての人間には天分・素質があります。皆一人ひとり、他の人間にはない独特の才能が母なる宇宙から与えられています。そして、最高の人生は天分のツボにハマる人生です。理性という観点から見て、最高の人生は天分のツボにハマる人生です。できることなら、皆を天分のツボにハメてあげる教育ができたら素晴らしい。どんな人間にも天分があると証明しているのは顔。顔が違うということにあります。顔が違うということは、自分には他の人ができない何かができる、俺が最高と言えるものを持っているんだということを顔は証明している。なぜそういうことが言えるのかと言うと、顔の形を決めるのは遺伝である、遺伝子である。遺伝子とは、能力が物質化したものであり、だから遺伝子のことを潜在能力と言うのである。潜在能力である遺伝子が原理となって人間の顔の形が決まるんだけど、その顔の形は全人類みな違う。ということは、顔が違うということは、「俺には俺にしかない独特の才能・能力が備わってるんだ」ということを証明してるんだ。そして、この自分にのみ与えられた才能・天分というものを発揮した時、理性的な魅力として人を感動させることになってくると。天分輝く。**

**次は感性ですね。感性的魅力とは、意志の力と愛の力と人間性が感性的魅力です。意志の力の魅力とは、不撓不屈の意志と言われる行動力、実践力、意志の力は具体的には、行動力・実践力。意志が魅力を持つようになるためには、何が必要なのか。意志の強さの根源はなんなのか。それは命から理屈抜きで湧き上がってくる欲求・欲望・興味・関心・好奇心という力であります。すなわち意志の強い人とは、欲求・欲望の強い人である。我々は欲求・欲望の強さを恐れてはならないし、それを醜いと思ってはならない。欲求・欲望こそ、生きる力の根源である。意志の強い人間になろうと思ったら、欲望の強い人間にならないといけない。だけども、欲望だけでは野獣だ。人間にとって魅力なのは、単なる欲望の強さではなくて、意志の強さである。欲望の強さと意志の強さはどう関係するのか。有機的な体系から言うと、意志の強さを持つためには、欲望の強い人間にならないといけない。だけども、欲望の強さと意志の強さは次元が違う。どうすれば人間的な魅力である意志の強さがつくれるのか。そのためには、「金が欲しい」という欲望を実現しようと思ったら、人間は考える。どのような方法で金を手に入れるかと考える。いろいろ方法はあって、働くもあるし、宝くじもある、競輪競馬もあり、泥棒もあり、強盗もあり、カツアゲもひったくりもある。いろいろ方法はあるけど、「この方法で金を手に入れよう」と決めた時、意志が決まる。すなわち欲望と意志との間には、理性的決断という行為が介在する。決断によって欲望は意志となる。そこで意志の強い人間だろうと思ったら決断とは何かということを考えていかなければならないと。**

**決断とはなんなのか。国語辞典的には決断というのは、多くの可能性の中からあるひとつのものを選び取ることを決断と言うとほとんどの辞書には書いてある。決断とは選び取ることだと国語**

**辞典的には解釈している。だけども、選び取るだけでは決断の中の決だけだ。決断において一番大事なのは、「断」。何を断つかということが一番大事なんだ。これがなかったら本当の決断はできないし、本当の意志の強さをつくることはできない。では、決断とはなんなのか。まずは決断とは何かを選び取らなければならない。何かを選び取ったのならば、その時自分が選び取らなかったものの中にどんなに素晴らしいものがあったとしても、あるものを選び取ったのならば、他のものへの思いを断ち切ること。逃げ道を塞ぐこと、退路を断つこと。すなわち決断とは捨てる勇気だ。捨てる勇気の無い人間は人生において迷う。また人生に悔いを残す。国語辞典で書いてあるような決断、すなわち選び取ることだけで人生を生きている人間は常に迷い、悔いるんですね。**

**なぜかと言うと、誰と結婚してもまたどんな仕事を選んでも、必ず問題は出てくる。自分が不完全であるがゆえの問題が必ず出てくる。誰かと結婚して、そして問題が出てくると「こいつと結婚したからこんなもんが出てきた。ひょっとしてあちらの方と結婚していたらこんな問題は出てこなかったのに」というのは理性の判断だ。理性という能力は、問題が出てこない道を探し求める。そして、理性は問題が出てきたら、間違った道を選んだと考えるのが理性だ。これは理性ゆえの迷いという現象である。我々は理性ゆえの迷いに陥ってはならない。迷いに陥らないためにはどうするか。あるものを選び取ったのならば、他の自分が選び取らなかったものの中にどんなに捨てがたい素晴らしいものがあっても、あるものを選び取ったのならば、他のものへの思いを断ち切る。これ以外に無い。逃げ道はない。退路を断ち。自分にはこれしか無いんだ、俺にはこいつしかおらんのだ、と。つまり、決断とは捨てる勇気。**

**なぜ捨てる勇気が人生には必要なのか。それは誰と結婚しても問題が出てくるから。どの会社に就職しても問題は出てくるから。不完全な人間である限り、問題や悩みが出てくることは避け難い。であるがゆえに、一旦決めたのならば、十分に考えて一旦決めたのならば、もう後はすべての可能性を断ち切って、自分にはこの道しかないんだと決めることを持って決断したと言うのである。決断することによって意志が決まって、意志が決まることによって行動力が湧いてくる。「もう自分にはこの道しかないんだから、この道から出てくる問題は自分が選んだ道から出てくる問題なのだから、自分が引き受けていかなければならない。どんな問題が出てきても逃げないぞ、たじろがないぞ、俺に任せておけ」と、その問題を乗り越えて行ける。これを不撓不屈の意志というのである。意志の強さは決断から生まれる。本当に意志の強い人間になろうと思ったら、どんな道を選んでも問題は出てくるし、出てくる問題はすべて自分を成長させるために出てくるんだから、すべての問題には答えがあるのだから、どんな苦難があっても諦めてはならない。答えが出るまで・うまくいくまで・成功するまで、「今度はどうしようか、今度はどうしようか」と思って努力し続けることを不撓不屈の意志と言うんだ。であるがゆえに本当に決断すれば必ず成功できる。問題には答えがあるんだ。すべての問題は自分を成長させるために出てくるんだ。すべての問題は自分の命の中にある潜在能力を引き出すために出てくるんだ。そして、その潜在能力が答えなのだから、すべての問題には答えがあるのだから、答えが出てくるまで諦めてはいけない。これらが不撓不屈の意志の原理ですね。**

**こういう意志の力を持ったら、それが魅力となる。普通なら諦めてしまうところをなかなか諦めない、結果が出るまで止めない、そこに「なんてスゴイやつだ」という感動が生まれてくるわけです。**

**2番目は愛の力です。愛が人を感動させる。愛の感動とは何なのか。愛が感動となる時、どういう**

**状態なのか。それは、死ねるという愛だ。この人の頼みなら死ねる。この仕事のためなら死ねる。この国のためなら死ねる。死ねるという思いになったとき、愛は感動を呼ぶ。子どもの為なら死ねるという親の生き様を見れば、みんなそのような映画を見たらみんな感動して泣くんですよね。死ねる以上の愛はない。なぜなら死んだらおしまいですから、死ねるという思いを持って生きる以上の愛はない。これは愛の極めつけだから、職業愛とは「この仕事のためなら死ねる」という気持ちを職業愛という。プロなら、今そこまで自分のやっている仕事を高めていかなければならない。この仕事のためなら死ねるという気持ちがなかったら、まだその人はプロじゃない、まだ半端だ。死ねるとはどういうことなのか、それは燃えるということ。命は****「生きたい、生きたい」と思っているものなんだけど、「生きたい、生きたい」と思っている生命が一番輝く時、一番命が生かされる時、それは生きたいと思っている命が、「このためなら死んでも良い」と思えることに出会った瞬間、最も美しく、激しく燃え上がる。死んでも良いと思えるものを持たない命は不完全燃焼の燻った命だ。半端な命だ、それじゃプロにはなれない。**

**大体、ひとつの仕事を何十年もやってきて、50歳くらいになってくると、「この仕事をするために俺は生まれてきたんだな」という考えに到達して、「これが自分の使命だ」と、そういう思いになって、そして命をかけるという生き方ができてくると言われています。これは孔子の論語の中にも出てきます。**

**「吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑はず。五十にして天命を知る。六十にして耳順（したが）ふ。七十にして心の欲する所に従へども、矩（のり）を踰（こ）えず」。これは順調に人生を歩んでいった場合の成長のプロセスと言われているんですよね。**

**50歳になってひとつの仕事をしてきたら、50歳になったらようやくこの仕事を天命として自分が感じる、意識することに到達できると言われております。天命として今ある自分の仕事をするということは、この仕事に命をかけるということですよね。その境地に至って初めて、ようやくプロに到達した、ようやくプロになったという実感が出てくるんじゃないかと思います。とにかく、愛の極めつけは死ねるという心情である。そこまで行き着かなかったら真実の愛ではない。死ねなければまだ真実ではない。**

**次は人間性の魅力です。人間性の魅力とは人格を磨くことによって出てくるもんですけど、人格には高さ・深さ・大きさがある。人格の高さを求め、人格の深さを求め、人格の大きさを求めていくと、人間性に魅力が備わって人を感動させる、人間性が人を感動させることになってくる。「なんて深いことを言うんだ。なんてでっかい人間なんだ、なんて高貴な精神を持っているんだ。」と、人は感動してくれる。これは人間独特の世界で、人工知能にはこういう世界はありません。**

**最後は肉体的魅力です。肉体的魅力にも3つの魅力があります。肉体は形がありますから、形あるものは必ず美を求める。形あるものにおいて美を求めないことは、母なる宇宙への裏切りだ。形あるものはすべて美しくなければならない、美しさを求めなければならない。であるがゆえに、肉体的魅力の第1番目は、容姿。容姿端麗という。形を極めていかなければ魅力にはならない。家にも形があるから、家は美しくなければならない。部屋も美しくなければならない。形あるあらゆるものがすべて美しくなければならない。そこに形あるものの魅力が出てくる。まず肉体的魅力の1つ目は容姿の魅力。**

**2番目は、目つき・表情・態度の魅力。目・表情・態度に魅力があるか。それを求め、極めていかなければなりません。目を磨く・鍛える…ためには、心を磨き・鍛えなければなりません。心を磨**

**くためには、気付きが必要だ。気付きがなければ、心は成長しない。「そうなのか、なるほどな」という気付きが心を成長させて、その心の成長が目に出てきて、それが魅力となる。表情も態度もみな心の現れ。心を成長させないと目も成長しない、表情も態度も成長しない。**

**目・表情・態度を成長させる活動の分野を持っているのが、俳優・演じる世界です。「人生は舞台だ」、誰にとっても人生は舞台だ。そして、その舞台の主役は俺だ。だから、人間は人間的魅力を持って人生を生きていこうと思ったら、我々は人生を演じないといけない。演じるとは、この状況でいかなる言葉を発すれば人は感動するか、を考えて発すること。またこの状況でいかなる行動をすれば人は感動するか、を自分で考えて、この時この場でとらなければならない行動を決める。これを演じると言います。演じることによって人間は成長する。演技なしには、今の自分を素直に出したらいいんだと思っている段階では、本当の人生における人間的成長はない。成長するためには演じなければならない。理想を演じること。それが役者だ。経営者は、最高の経営者を演じなければならない。組織においてリーダーは、最高のリーダーを演じなければならない。組織においてフォロワーは、最高のフォロワー（部下）を演じなければならない。人を感動させるような部下を演じなければならない。人を感動させるようなリーダーの姿を自分は実現しなければならない。**

**「こういうことを映画の中でやったら、経営者は皆を感動させることになるだろうな」と思ったら、それを自分で演じてみる…これも努力の方法です。**

**扇千景さんという方、宝塚の出身で政治家と結婚されて、のちに自身も政治家になられた方です。別に大したことはしていないのですが、党首になってしまったりして、その後は突然参議院議長にもなるなど、なぜ、人心を極めて、天皇陛下と謁見できるような立場にまで上り詰めたのか。あれは演じているんですよ。その時、その時を完璧に理想を演じる…そういう仕方をしてきたから、周りの方々がなんとなく持ち上げてしまうんですね。政治的な実績はないのですが、だんだんと人から慕われて持ち上げられ、ついに位人臣を極めるというところまでいってしまった。人生には演技が必要ですね。最高の父親を演じる。最高の主人を演じる。最高の経営者を演じる…そういう演技をする力も非常に大事な人間的魅力のつくり方です。目を鍛え、表情を鍛え、態度を鍛える。これが2番目です。**

**最後の3番目は、人間は動物ですから動くということが本質にある。であるがゆえに、行動の美学を求めなければならない。それはなんなのか、立ち居振る舞いである。人間は立ち居振る舞いの中に美を実現しなければならない。魅力をつくるということは理想を追求することなので、一朝一夕にすぐできるわけでもないですし、努力もしないとダメですが、だけどもやっぱり立ち居振る舞いにも美しさを、ということも日本人は武士の社会の中で、あるいは平安時代でも貴族はその生活の中で実践してきて、日本文化特有の奥ゆかしさをつくってきたわけであります。今は理性化されてきてしまって、奥ゆかしい何かしら味わいのある行動というものがだんだんなくなってきたのは非常に残念であります。だけどもやっぱり、立ち居振る舞いの中に美を追求するということは、芸術としてもバレリーナのバレエとか、どんなスポーツの中にもそれぞれの規則・ルールがあって、そのルールに従って行動することは、美だと。そういう意味でいろいろパフォーマンスやちょっとした振り付けなんかでも魅力が溢れてくることもありますので、そういったちょっとした振り付けや身のこなし方というものも、会社の業務の中でもお客様に対する態度の中にも、考えながら生きていったら、もっと素晴らしい仕事になるんじゃないかなということも考えられます。とにかくAIの時代をどう生きるかという意味から、もう一度人間にしかできない魅力とはなんなのかということを考えてみてもらいたいと思いまして、今日はその話させてもらいました。どうもありがとうございました。**